大地

第　58　号
2019.1.30.発行

淨　國　寺
上越市寺町3丁目14-10
☎025-523-5724

【俳句】

山崎　睦

白髪に赤きセーター老紳士

朝寒もぱっと起きればさほどでも

枯尾花バス停の名は古戦場

吹雪道風に背を向け小走りに

草千里親子と馬と春の風

末黒野にしてほつほつと芽吹くもの

句集『朝の光』より
平成六～七年

何の役にも立ちませんが

山崎隆史

数年前、とあるスマートホン向けのゲームがヒットし、テレビでも取り上げられました。当時は、スマートホンを操作しながら前を見ずに歩く、いわゆる「歩きスマホ」が問題になり始めた頃で、歩きスマホを助長すると思われたそのゲームがやり玉にあがりました。その中でしばしば、「何の役にも立たない物に夢中になって」という言い方をする人がいたのですが、ゲームを好きな者としては、そんな的外れな意見を残念に思いました。

ゲームとはいうまでもなく娯楽の一種であり、「役に立たないけれども楽しい」のが娯楽というものなのです。例えば、相撲取りを評価するのに、歌を歌うのが上手だとか下手だとかは問題にならないでしょう。同様に、娯楽にとって役に立つかどうかは重要な事では無いのです。

しかし、人は「役に立たない物をただ楽しむ」のは後ろめたいので、芸術性だとか教養だとか伝統だとか社会的メッセージといった言い訳をするのです。この言い訳が上手く働くと、より高尚な娯楽として世間に認められるのです。きっと間違いありません。

私の好きな内田百閒（うちだひゃっけん・1889～1971）という作家は、鉄道に乗る事を娯楽にしていました。彼は、後ろめたく感じるどころか、むしろ娯楽が「役に立つ」ことを不純物のように感じるようで、『特別阿房列車（とくべつあほうれっしゃ）』という随筆では次のように書いています。

なんにも用事がないけれど、汽車に乗って大阪へ行って来ようと思う。（略）しかし用事がないという、そのいい境涯は片道しか味わえない。なぜと云うに、行くときは用事はないけれど、向うへ着いたら、着きっ放しと云うわけには行かないので、必ず帰って来なければならないから、帰りの片道は冗談の旅行ではない。そう云う用事のある旅行なら、一等になんか乗らなくてもいいから三等で帰って来ようと思う。

私だって、読書は好きですが、「おもしろいから読め」ではなく「教養のために読め」と言われたら、読む気を無くすと思います。娯楽はただ楽しめば良いと思うのです。

さて、それはともかくとして、そのゲームが遊んで楽しいかどうかと、そのゲームをどの位どのように遊ぶべきかとは、それはそれで別の問題なのです。

歩きスマホ・ながらスマホは、絶対にやめましょう。

酒を愛で歌を愛した父

山崎　睦

昭和十三年五月、縁あって淨國寺へ嫁ぎ、父隆英との生活が始まった。しかし健康な父との生活は一年半にも満たなく、父は脳卒中に倒れ、戦前戦後、十一年の療養生活を送る。けれども私にとって非常にあたたかい父で

水ももらさぬ夫婦の中に
たまに喧嘩の波も立つ

と自作の歌を詠み、悪戯っ子のように笑いながら私の顔をのぞき込まれもした。

父は酒が大好き、そもそも淨國寺は代々酒好きで「高田の寺院酒番付で東の大関の地位を今だに守っている」とよく聞かされた。

私が淨國寺へ来る時も「朝酒、晩酌だけは嫌な顔をしないでほしい」が約束だった。

日々の生活は、夜の八時ころには床の中、翌朝早くから庭に出て植木の見回りと手入れ、それからおもむろに縁先にお膳を持出し、一口呑んでは植木の所へ、又一口呑んでは植木へと、十一時ころまでゆっくりと続く。今にして思えば良き時代であったと言えよう。

庭いっぱいに並べられた植木鉢は三百余鉢実生、取木と自分で育てられたものが殆どでたまに訪れた人が「この枝を切られたら」とすすめても「折角いままで延ばしてきたのだから」と頑として譲らないところなど、父らしい温かさを感じた。

本好きで、晩酌の後、夜おそくまで読書をしておられることもしばしば見られた。義兄金子大栄先生の説かれた『二河譬』の本を片時も離されず、外出の時はそれを懐に入れ胸を膨らませ出掛けられた。

一面正義感が強く、曲がっているとなればどんな相手でも立ち向かって行かれる。先年亡くなられた暁烏先生は、高田へお出掛けになるとよく父を訪ねて来られた。そして「よう！越後の名物男」と病気の父を励まされた。

かの犬養首相ともやり取りしたらしく、首相から父宛の手紙も残っている。

師にも友にも恵まれた父は、師を友を敬い大切にされた。

父は、若いころより短歌に勤しみ歌作りに熱心であった。折りにつけ歌を詠み、出来た作品を家の者や友人に見せて楽しんでいた。淨國寺の庫裡裏庭に一つの歌碑が建っている。

土筆（つくつくし）生きむ願いの一筋に
大地を割りて伸び出（い）でにけり
大　水

大水は父の歌の雅号、歌碑に書かれた字は夫・武雄（父の次男）の筆によるものだ。

いつ頃か父は「自選歌集」を出すことを発心し、こつこつと一人でその作業を進めていたようである。金子大栄先生の序文まで付けられ、整理された歌集原稿が残されている。

原稿の日付は昭和十五年八月十四日、六十歳で脳卒中で倒れる二年前のこと。

歌集発刊のことは、父が病に倒れたこと、戦争への突入、戦後の混乱と続き、日の目を見ずに終わった。

ようやく歌集『願生』として出されのは、四十三年後の、夫武雄の三回忌を迎えた昭和五十八年四月二十日であった。

ここまで延び延びになり、父には申し訳なく思うとともに、それでも世に出すことができ何か安らぐものがある。

柄にもなく机の中を整理していたら偶然に母睦の原稿が出てきました。

三十六年も前のことになりますが、父武雄の三回忌法要を期に、長年の懸案であった祖父隆英の歌集『願生』を発刊、その折りに母が書いたものです

母は日ごろより「私はお父さん（隆英）から一度も嫌な思いをさせられたことがなかった」と話しておりましたが、この文にも、それが滲み出ています。

なお歌集『願生』は、まだ在庫があります。ご希望の方はお知らせください。お配けいたします

（隆昌記）

オウム真理教事件と死刑制度

山崎隆昌

昨夏は異常に暑い日が続き、その上に、集中豪雨、地震、台風など各地で自然の猛威にさらされた夏でした。この異常気象が、これから「普通」になるのかもしれません

猛暑の七月、オウム真理教の麻原彰晃ら十三人の死刑が執行されました。

死刑囚の罪科は、坂本弁護士一家殺人事件、松本サリン事件、地下鉄サリン事件、いずれも残虐で凄惨なテロ行為で全く許されるものではありません。

しかし、突然のように行われた十三人もの死刑執行のニュースに、私は何かもやもやとした気味の悪いものを覚えました。

自分自身、前から日本の死刑制度について違和感を感じていましたので、このニュースにそのような感じたのでしょう。

オウムの死刑執行後の朝日新聞の世論調査によれば、死刑制度の存続賛成が57%、制度廃止賛成が41%、どちらともいえないが2%でした。日本では依然として死刑制度存続が多数派です。死刑制度存続・廃止の議論で死刑制度存続に賛成の考え方には

(1)凶悪犯罪者は命をもって罪を償うべき

(2)被害者遺族に死をもって謝罪すべき

(3)凶悪犯罪への抑止効果　など

死刑制度は廃止すべきの考え方には

(1)人が人を殺すことは人の道に反する

(2)誤判、冤罪に対する救済の道が断たれる（人間には誤りは不可避と考える）

(3)凶悪犯罪の抑止にはならない　など

国際的にみれば、死刑制度を存続している国は少数派です。アムネスティ日本によると世界一九八ケ国・地域のうち、一四二ケ国が廃止・停止しています。なお存続している国は五十六ケ国で30%にもなりません。

先進国といわれる経済開発協力機構（OECD）の加盟三十六ケ国のうち、死刑制度が残るのは日本と米国、韓国の三ケ国だけで、韓国は十年以上停止しており、米国でも半数近い州が廃止や停止をしています。

欧州連合（EU）は「生命の尊厳」の基本理念から死刑制度廃止が加入条件です。

逆に制度を維持する国は、アジアや中東に多く残ります。個人の生命、生きる権利などに対する歴史や文化の違いでしょうか。

ちなみに英国が死刑制度を廃止したのは、50年前の一九六九年のことです。

日本の憲法は「拷問及び残虐な刑罰の禁止」については次のように定めています

第三十六条　公務員による拷問及び残虐な刑罰は、絶対にこれを禁ずる

絞首刑は残虐な刑罰ではないのでしょうか。最高裁判例は「残虐ではない」と判断します。

真宗大谷派は、死刑執行三日後の七月九日『死刑執行の停止、死刑廃止を求める声明』を宗務総長の名で発表しました。その中では「死刑の執行は、根源的に罪悪を抱えた人間の闇を自己に問うことなく、他者を排除することで解決とみなす行為で（略）、罪を犯した人がその罪に向き合い償う機会そのものを奪います」と述べられ、死刑廃止は「どの人も救うと誓われた阿弥陀の本願の教えに基づく」ものと表明されております。

親鸞は「悪人正機」を説かれ、『歎異抄』13章で「わが心のよくてひとをころさぬにあらず。また害せじとおもうとも百人千人をころすこともあるべし」と述べられています。

『最後の親鸞』の著者吉本隆明は「親鸞だったら麻原彰晃は往生できると言うでしょうか？」の質問に、「間違いなく、往生できると言うでしょう」と、確たる口調で答えたといいます（中島岳志著『親鸞と日本主義』）

この事件で最も大切な事は、オウムの教義がどのように無差別テロ事件と結び付いたのかを明らかにすることですが闇のままです。

真宗大谷派教団には、戦前、親鸞教学の上から戦争参加を熱心に説いた歴史があります。

教義と実践、信心と行動が問われている、その意味で、オウムの事件は私の問題です。

ワン公物語⑱

―華のつぶやき―

山崎　華（慎子代筆）

私は華。パグ犬の雌。ただ今十一才と八カ月。この冬はまァ暖かい方だったとは思うけれど、私は冬も嫌い。だって寒いんだもの。とは言え、私は二十四時間エア・コンの効いた部屋に居るのだからこれ以上の贅沢は言えない。

母さんは私に似て？暑さ寒さに滅法弱い。そのくせ、暖房は兎も角、夏のクーラーは苦手という厄介な人である。良く言えば敏感、あるいは繊細、悪く言えばこらえ性が無い。あるいは我儘。でもこれは内緒だよ。だってモノの感じ方は個人差が大きいし、母さんは低体温だからクーラーの中に居続けると、体の芯まで冷たくなって、揚げ句気分まで悪くなるんだって。その点私は随分お気楽。

母さんは本来、犬や猫を育てたいと思う程の興味はなかったのだ。それがいざワン公と暮らすことになった時、獣医さんに言われたのだ。「この犬種は夏は冷房、冬は暖房をしっかりやってやらないと可哀想ですからね」。母さんは電気代など気にしながらも律義にそれを守ってくれているのだ。だから私は年中快適。ある意味軟弱なワン公である。

ダックスフントを飼っているセツコさんは「うちなんて真夏も真冬も玄関のたたきで過ごしているのに華ちゃんは幸せだねぇ」と半ば呆れて笑いながら頭をなでてくれる。

寒がりの母さんに対して、父さんは寒さにも強い。真冬でも朝早く起きて動き出す。寒さへの不満をかこつことがない。

正反対の二人だから時々すれ違うのを目撃することがある。「どうしたんだろう、この寒さ。好い加減にして貰いたいわ」と母さんが言う。「でもこれが常態になっていくかも知れないんだよ。気候は随分変なことになってるからね」と父さんが返す

母さんの「ムッ！」という声が聞こえたような気がしたのは私の錯覚なのだけれど、母さんは明らかにつまらなそうな顔になっている。母さんの心の声が聞こえる。「また、これだ。私は別に解説や評論を聞きたいんじゃないのに。ただ共感してもらいたいだけなのにね。この寒さには参ってしまうね　って」

母さんの何となく不機嫌が気にはなるけど父さんにはさっぱり察しがつかないらしい。

二人のどこかヨソヨソしい雰囲気に、隆史兄さんと直子さんが気付いてしまうことがある。母さん、何とか取り繕うこともあるけど時によってツンケンが止まらない。そんな時優しい二人は気付かなかったことにして、早々に退散してくれるのだ。

父さんと母さん　今年の秋には結婚五十年なんだって。こんなふうに五十年も過ごして来たのかなァ。

仲が良いような　それ程でもないような、ヘンな夫婦だなと時々思う。しかしなにしろ私自身は結婚というものをしたことがないし主に観察できたのはこの二人のことだけで、しかもたかだか十年余りのことだものね。案外世の中の夫婦ってこんなモンなのかな。

ここまで思いのまゝつぶやいて、私は少し不安になる。山崎さんちのあれこれを、こんなに気儘につぶやいてしまって良いのだろうか。

まして私は先回、個人情報云々とさかしらに言ったばかりではないか。しかも今回は少し母さんへの肩入れが過ぎるのではないか。代筆者への遠慮？忖度？はたまたゴマスリなのかな。

うーん　マ・イイか！

（以下　次号）

過日山岳の岳が思い出せなかった。頭の中で漢字の連想ゲーム、私は一人あせってしまう。山は分かるのだが丘を思い出せない。（あー、とうとう始まったのか）との思いがよぎる。そうでなくとも日々つきつけられる老化現象。こんな簡単な文字を思い出せないと悶々とし始めた時、ふと丘に山だと思い当たり一先ずホッとする。七十代の日々。（慎）